

見よ、
世の罪を取り除く
神の小羊
救いの計画

人類が失われ、神の創造なされた世界が不幸と病気と死の運命を背負った人間によって満たされ、罪びとにとってのがれる道のないことがわかったとき、天は悲しみに満たされた。・・・その時イエスは、失われた人類のためにのがれの道が備えられたことを天使の万軍にお知らせになった。イエスは、ご自分の生命を身代金として提供し、死の宣告をご自身に引きうけたいと天父に嘆願なされたことを語られた。それは、イエスを通して人類が罪のゆるしを得、イエスの血の功績を通し、また神の律法に従うことによって神の恩恵をあたえられ、美しい園へつれて行かれて生命の木の実を食べることができるようになるためだった。—初文260, 261

救いの計画（犠牲）

最初天使たちはよろこぶことができなかった。というのは、イエスが彼らに何一つかくさないで、救いの計画をうち明けたもうたからだ。イエスは、ご自分が天父の怒りと罪を犯した人類との間に立たれることや、ご自分が不義とあざけりを一身に負われても、彼を神のみ子として受け入れる者は少ないことなどを、天使たちにお語りになった。・・・そして最後に、教師としてのイエスの使命が達成されてからは、人の手に渡され、サタンと悪天使たちが悪人たちをそそのかして、苦しめることのできるかぎりのあらゆる残虐と苦難を加えるのを忍び、最も残酷な死に方によって、不義な罪びととして天と地との間にかけてられ、天使たちすら目をそむけ、顔をおおうような恐るべき苦悶にあわれるのである。イエスは肉体的な苦痛を経験されるばかりでなく、それとは比べものにならないほどの精神的な苦痛を味わわれる。全世界の罪の重荷が彼の上のしかかるのである。—初文 261, 262

救いの計画（仲保）

イエスは、ご自分が死んで三日目にふたたび甦えり、わがままで不義な人類の執り成しをするために、天父のもとに昇天されるということをお語りになった。—初文 262

**救いの計画
（犠牲はみ子の命でなければならない）**

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。—初文 262

質 問

贖罪の犠牲はなぜキリストの生命でなければならなかったのだろう？

なぜキリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのだろう？

天使の命では不十分であったのはなぜであろう？

キリストの生命でなければならない理由

破られた神の律法は、罪人の生命を要求した。人間に代わって、その要求に応じられるのは、全宇宙にただひとりしかなかった。神の律法は、神ご自身と同様に神聖であるから、罪の贖いをすることができるのは、神と等しいかただけであった。罪を犯した人間を律法ののろいから贖い、再び、天と調和させることができるものは、キリストのほかになかった。—あ上53

神はそのひとり子を賜ったほどに

この世を愛して下さった

救いの計画は、地球が創造される前にたてられていた。キリストは「世のはじめからほふられた小羊」(黙示録13:8・詳訳聖書)であった。しかし、宇宙の王であられる神にとっても、み子を、罪を犯した人類のために死にわたすことは苦闘であった。ところが「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)。ああ、贖罪はなんと神秘的なものであろうか。神を愛さなかった世界を、神はどんなに愛されたことであろう。「人知をはるかに越えた」その愛の深さをだれが知ることができるだろうか。永遠の命を与えられた人々は、このはかり知れない愛の奥義を、永遠にわたってさぐり求めて、驚き賛美するのである。—あ上54

人間の努力+神の力

= 神の性質との調和

神は、キリストによって、ご自分をあらわし、「世をご自分に和解させ」ようとなされた(コリント第2・5:19)。人間は罪を犯して墮落したために、自分の力では、清く恵み深いご性質の神と調和することができなくなった。しかし、キリストは、律法の罪の宣告から人間を贖ったあとで、上からの力を人間に与えて、人間の努力とそれを結合させることがおできになるのであった。こうして神に対する悔い改めとキリストを信じる信仰によって、アダムの墮落した子らは、もう一度「神の子」(ヨハネ第1・3:2)となることができるのであった。—あ上54

人間の回復、宇宙の喜び

罪と罪人は消し去られて、二度と天と地の平和を乱すことはない。キリストは、父が承認なされた計画に天使軍が同意することを命じ、彼の死によって、墮落した人間が神と和解することができることを喜ぶようにお命じになった。

そのとき、喜び一口では表現することのできない喜びが天に満ちた。贖われた世界の栄光と幸福は、いのちの君の苦痛と犠牲をはるかに越えたものであった。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」(ルカ2:14)と、ベツレヘムの丘で鳴り響いたあの歌の最初の調べが、天の宮廷に反響した。新しい創造に歓喜したよりも、さらに深い喜びをもって、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」(ヨブ記38:7)。—あ上56

人間にも贖罪の計画が知らされた

贖罪に関する最初の予告が、人間に与えられたのは、園でサタンに宣告が下されたときであった。主は言われる。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの

間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記3:15)。アダムとエバが聞いているところで語られたこの宣告は、彼らにとっては、約束であった。・・・

天使たちは、われわれの祖先に、人間の救いのために考え出された計画をさらにくわしく教えた。アダムとエバは、大きな罪を犯したにもかかわらず、サタンのなすがままに放任されてはいないという保証が与えられた。神のみ子が、彼らの罪を贖うために、ご自身のいのちを提供されたのである。彼らに恵みの期間が与えられ、悔い改めとキリストを信じる信仰とによって、彼らは、ふたたび、神の子となることができるのであった。—あ上58, 59

キリストの犠牲の重さを悟った人間

アダムとエバの罪が要求した犠牲は、神の律法の神聖な性質を、彼らに明らかに示した。そして、彼らは、これまで感じたこともないほどに、罪のとがと罪の悲惨な結果とを知った。彼らは、後悔と苦悶のうちに、その刑罰が、彼の上に負わせられないように嘆願した。彼の愛こそ彼らのすべての喜びの源であった。むしろ、その罰が彼らと彼らの子孫の上にくだることを願った。—あ上59

キリストの犠牲の重さを悟らない人は 憎悪と復讐(しゅう)の精神を抱く危険がある

憎悪と復讐(しゅう)の精神はサタンから出、この精神がサタンに神のみ子を殺害させたのである。だれでも悪意や冷酷な心を抱く者は、これと同じ精神を抱いているのであって、その実は死に至らせるものである。種の中に草木がすでに包まれているように、復讐心の中に悪の行為が包まれている。「すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめではない」(ヨハネ第1・3:15)。—祝山70

神の二重の所有権

「兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会で引きわたされるであろう」(マタイ5:22)。神はわたしたちの贖いのためにみ子を賜うことによって、人間一人一人の魂をどんなに高く見ておられるかをお示しになった。神は、他人をさげすんでうわさする自由をだれにも与えておられない。わたしたちは、周囲の人々に欠陥や弱点を見るであろうが、神はすべての魂は自分のものである— すなわち創造によって自分のものであることと、キリストの尊い血をもって買いとられたゆえに二重に自分のものである— と主張なさる。人はすべて神のみかたちにかたどって創造されたのであって、どんなに墮落した者であっても、たいせつにやさしく遇しなければならない。キリストが生命をささげられたところの一人の魂を、さげすんで語ったことばに対してさえ、神はその責任を問われるのである。—祝山78

人にばかと言う者は自分を サタンの領域に置く

「また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう」(マタイ5:22)。旧約聖書では、「ばか者(fool)」ということばは背信者、すなわち悪に全くふけてしまった者を言うのに使われている。だれでも兄弟を背信者として、あるいは神をさげすむ者として非難する人は、その人自身が同じ非

難に値するとイエスは言われる。

告発は悪魔の武器であるから、もしそうなさっていたら、キリストはサタンの領域にご自分を置かれたことになる。サタンは聖書の中で、「われらの兄弟らを訴える者」と呼ばれている(黙示録12:10)。イエスはサタンの武器はいっさい用いようとはなさらなかった。—祝山79

悪い言葉を口にしてはいけない

これはわたしたちのための模範である。わたしたちはキリストに敵対する者との争いにまき込まれても、報復の精神をいだいて口を開いたり、ののしりさばくように聞こえることばを言ったりしてはならない。神の代弁者として立つ者は、天の君でさえサタンと争ったときに避けてお用いにならなかったようなことばを語ってはならない。審判と宣告のわざは神にゆだねるべきことである。—祝山71, 72

人間の墮落は深まるが悪に汚されない者がわずかに存在する

こうして、エデンで神の宣告が与えられたときから、洪水のときまでと、そして、神のみ子の初臨までの歴史上の重大なできごとがアダムに示された。キリストの犠牲は全世界を救う価値が十分あるにもかかわらず、多くの者は罪の生活を選んで、悔い改めず、従わないことを彼は示された。…人間の寿命は、人間自身の罪の生活のために短縮する。人間の背丈は低くなり、その耐久力は減少し、道徳的、知的能力は衰えて、ついに世界はあらゆる不幸で満たされる。人間は、食欲と情欲をほしいままにすることによって、贖罪の計画の大真理を理解することができなくなる。しかし、キリストは、天を去られた目的に忠実に従って、人間をみこころにとめ、彼らの弱点と欠点を彼のうちに隠すように、いまなお招いておられる。彼は信仰をもって、彼に来るすべての者の必要を満たされる。こうして、悪がはびこるなかにあつて、神の知識を保ち、悪に汚されない者が、わずかながら常に存在するのであった。—あ上60, 61

犠牲は神がお与えになる

犠牲の供え物は、神が人間のためにお定めになったもので、罪の悔い改めと約束の贖い主への信仰の告白を、いつまでも思い起こさせるものであった。それは、死をもたらすものは罪であるという厳粛な事実を、墮落した人類に印象づけるためであった。アダムにとって、最初の犠牲をささげることは、非常に心の痛む儀式であった。彼は、神だけが与えることのできる生命を奪うために、手を振り上げなければならなかった。彼が死を見たのはこれが最初であった。もし彼が神に服従していたならば、人間も獣も死ぬことはなかったことを悟った。彼が罪のない犠牲を殺したとき、自分の罪のために、傷のない神の小羊の血を流さなければならないことを考えて、ふるえおののいた。神の愛するみ子の死によらなければ、償うことのできない自分の罪の大きさを、この光景は、さらに深くなまなましく彼に示した。罪を犯した者を救うために、そのような犠牲をお与えになる無限の恵みに彼は驚いた。—あ上61

主がささげるべき犠牲を与えられる

モリア山上で、アブラハムは息子から、「燔祭の小羊はどこにありますか」ときかれた。父は「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えた(創世記22:7, 8)。そうして、イサクの代りに天から備えられた牡(お)羊に、アブラハムは人類の罪のために死なれるおかたの象徴を見

た。—希上118

神は最後の残りの教会に救いの計画の宇宙的な意味を教えて下さった

わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。
—ヨハネ15:15

神の遠大な責任：

贖罪の計画のさらに広く深い目的

しかし、贖罪の計画は、人類の救済より、もっと広く深い目的をもっていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなく、この小さな世界の住民が、神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなく、それは、宇宙の前で、神の性質を擁護するためであった。…人間の救いのためにキリストが死なれた行為は、人間が天にはいる道を開いたばかりでなく、神とみ子が、サタンへの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは、神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった。—あ上61, 62

大争闘の焦点：神の律法の正当性

大争闘は、最初から神の律法に関して戦われたのである。サタンは、神は不正で、神の律法は不完全であるから、宇宙の幸福のためにそれを変更することが必要であることを証明しようとしてきた。彼は、律法を攻撃してその創始者の権威をくつがえそうとしていた。この争闘において、神の律法が不完全なもので、変更が必要であるか、それとも、完全で不変のものであるかが示されるのであった。—あ上62

宇宙は神の愛を目撃し

神の統治の正当性を悟った

キリストが墮落した人類を救うために、ご自分を低くされたことは、全宇宙の驚嘆的であった。…キリストが十字架上で、苦悶のうちに、「すべてが終わった」と叫んで息をひきとられたとき、勝利の叫びは、すべての世界と天そのものになり響いた(ヨハネ19:30)。この世界で長い間継続された大きな戦いは、ここに勝敗が決し、キリストが勝利者であられた。彼の死は、父とみ子とが人間に対して十分な愛をもち、自己否定と犠牲の精神をあらわされるかどうかという疑問に答えた。サタンは、偽り者、殺人者の本性を暴露した。もし彼に天の住民を支配させるならば、彼の権力下にあった人々を支配したのと同じ精神で、天の住民たちをも支配するにちがいないことが明らかになった。神に忠実な宇宙は、声をそろえて神の統治をたたえた。—あ上63

キリストの犠牲が証明した3つのこと

もし律法を変えることができたならば、キリストの犠牲はなくても、人間は救われたことであろう。しかし、墮落した人類のために、キリストがいのちをささげる必要があったという事実は、罪人が神の律法の要求から免除されることはないということを証明している。それは、罪の報酬が死であることを実証した。キリストが死なれたときに、サタンの滅びることが決定した。しかし、多くの者が主張するように、もし律法が十字架によって廃されたのであれば、神の愛するみ子の苦悩と死とは、サタンが要求するものを彼に与えるためだけのものとなってしまふ。そうであれば、悪の君は勝利をおさめて、神の政府に対する彼の攻撃は是認されたことであろう。キリストが人間の罪の刑罰を負われ

た事実そのものが、すべての造られた者に対して、①律法が不変であること、②神は正しく、あわれみ深く、自己を否定するかたであること、そして、③神の政府の統治には、無限の公平とあわれみが結合していることを大いに証明してあまりあるのである。—あ上63, 64

**キリストの犠牲によって
擁護された3つのこと
(あ上63, 64)**

① 証明されたこと： 律法が不変であること

⇒ 擁護されたもの： 神の**律法**

② 証明されたこと： 神は正しく、あわれみ深く、自己を否定するかたであること、

⇒ 擁護されたもの： 神の**品性**

③ 証明されたこと： 神の政府の統治には、無限の公平とあわれみが結合していること

⇒ 擁護されたもの： 神の**統治**

キリストの犠牲以外に方法はなかったのか？

しかし、キリストが地上にくだって苦難と死を受けられたのは、ただ人類の贖いを成し遂げるためだけではなかった。キリストは「律法を大いなるものとし」(英語訳)これを「光栄あるものとする」ために来られたのである。この世界の住民が律法を正しく認識するようにするだけでなく、神の律法が不変なものであることを、宇宙の全世界に対して証明するためであった。律法の要求が廃止できるものであったら、神のみ子は罪を贖うためにご自分の生命をささげられる必要はなかったのである。キリストの死は、律法が不変であることを証明している。罪人を救うために、父とみ子が限りない愛に迫られて払われた犠牲—この贖いの計画以外に方法はなかった—は、公義とあわれみが神の律法と統治の基礎であることを全宇宙の前に証明している。—大下241

見よ、

世の罪を取り除く

神の小羊

小羊を信じる信仰によって

罪が取り除かれる

古代の聖人たちは、キリストの血を信じる信仰によって救われた。彼らは、犠牲の動物の死の苦しみを見て、各時代の深淵のかなたに、世の罪を取り除く神の小羊を見たのである。…

人間は自分の力で、律法の要求に従うこともできないのである。罪人は、ただ、キリストを信じる信仰によって、罪から清められ、創造主の律法に従うことができるようになるのである。—患下112

小羊を見るとき自分をみとめてもらいたいという欲求がなくなる

悔い改める罪人に、「世の罪を取り除く神の小羊」に目をそそがせなさい(ヨハネ一ノ二九)。見ることによって彼は変えられる。…悲しみの人で、病を知っておられたイエスが、失われた者を救うために、軽蔑され、侮辱され、嘲笑され、町から町へ追われながら働かれ、ついに使命を達成されたのを見るとき、イエスがゲッセマネで大粒の血の汗を流し、十字架上で苦しみのうちに死なれたのを見るとき、—われわれがこうしたことを見るときに、自分をみとめてもらいたいという欲求の叫びは、もはやなくなる。イエスを見上げて、われわれは、自分自身の冷淡さ、無気力、利己心を恥じる。われわれは、主に心から奉仕することができさえすれば、何になってもよいし、あるいは何にもなら

なくてもよいのである。われわれは、主のためなら、イエスにならって十字架を負い、試練と恥と迫害に耐えることをよろこぶのである。—希中219

神の方法に頼らない＝自分の力に頼る ～カインの場合～

カインは約束の犠牲について、また犠牲の供え物の必要について、心中に不平と不信をいだきながら神の前に来た。彼の供え物は、罪の悔い改めの表明ではなかった。彼は、今日の多の人々と同様に、神に指示された通りの計画に従い、約束の救い主の贖罪に全く自分の救いをゆだねることは弱さを承認することであると思った。彼は、自己信頼の道を選んだ。彼は自分の功績に頼った。彼は小羊を持ってきて、その血を供え物にまぜることをしないで、彼の実、彼の労働の産物をささげた。彼は自分から神にささげるものとして供え物をささげ、それによって、神に喜ばれたいと思った。カインは、神に従って祭壇を築き、犠牲をたずさえてはきたが、彼は部分的に従っただけであった。彼は最も重大な部分、すなわち、救い主の必要を認めることを省略していた。—あ上66

神の方法に頼らない＝自分の力に頼る ～1844年の諸教会の場合～

諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った。そして、彼らは、第一天使の使命に反対することによって、第二天使の使命の光を見ることができない状態に陥ってしまった。—初文391

神の方法に頼らない＝自分の力に頼る ＝サタンの領域に自分を置く

夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべきであったが、その夜中の叫びも役には立たなかった。初めの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照らしている第三天使の光を見ることはできなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、これらの使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へはいる道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができないことを、わたしは見た。彼らは、無益な犠牲をささげていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまわれた部屋に向かつて、彼らの無益な祈りをささげている。そして、この欺瞞に満足したサタンは、宗教的性格を装って、彼の力としるしと奇跡を行い、これらの自称クリスチャンたちの心を、彼自身に引きつけ、しっかりと彼のわなに捕らえてしまうのである。・・・教会は、意気盛んになって、神が彼らのために驚くべき働きをしておられると考えるのであるが、それは、別の霊の働きなのである。—初文423, 424

サタンの憎む2つの大真理

サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである。—大下221

聖所の奉仕に示された

贖いの大計画の最終ステップ

型としての奉仕において、大祭司は、イスラエルのために贖罪をなし終えると、外に出て来て、会衆を祝福した。そのように、キリストも、仲保者としての働きを終えられると、「罪を負うためではなしに……救いを与える」ために来られて、彼を待っている人々に永遠の生命をお与えになる(ヘブル9:28)。祭司が聖所から罪を除去したときに、アザゼルの山羊の上にそれを告白したように、キリストは、罪の創始者であり煽動者であるサタンの上に、これらの罪をすべて置かれるのである。アザゼルの山羊は、イスラエルの罪を負って、「人里離れた地」に送られた(レビ記16:22)。そのように、サタンは、自分が神の民に犯させたすべての罪を背負って、千年の間、この地上に監禁される。地上はその時、荒れ果てて住む者もない。そして彼は、ついに、すべての悪人を滅ぼす火の中で、罪の刑罰を余さず受ける。こうして、罪は最終的に除去され、進んで悪を捨て去った人々がすべて救われて、贖いの大計画は完成するのである。—大下218

神が与えられた救済の手段を通して

完全な品性を形造る

われわれが、キリストの贖罪の血を信じることによって、罪を捨て去らなければならないのは、現世においてである。われわれの尊い救い主は、われわれが彼と結合して、われわれの弱さを彼の力に、われわれの無知を彼の知恵に、われわれの無価値さを彼の功績に結びつけるよう招いておられる。神の摂理は、われわれがイエスの柔和と謙遜を学ぶ学校である。主はわれわれの前に、われわれが選ぶ安易で楽しく思われる道ではなくて、人生の真の目的を、常に置かれる。われわれの品性を天の型に形造るために神が用いられる手段に、われわれは協力しなければならない。このことを怠ったり、遅らせたりする者は、必ず魂を最も恐ろしい危険にさらすことになるのである。—大下397, 398

黙示録

5:11 さらに見ていると、御座と生き物と長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、

5:12 大声で叫んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。

5:13 またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。